

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月11日現在

機関番号：37104

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22730495

研究課題名（和文） 集団討議における話者の取得役割の時系列的変化と集団内構成に関する動的アプローチ

研究課題名（英文） Dynamic approach on time-series transition of discussants' role-acquisitions and an intragroup constitution in a group discussion

研究代表者

藤本 学 (FUJIMOTO MANABU)

久留米大学・文学部・准教授

研究者番号：00461468

研究成果の概要（和文）： 10種類の話者役割タイプの特定と、それらの取得レパートリを測定する尺度を作成した。グループ・ディスカッション実験を実施し、メンバーの話者役割レパートリとチーム・パフォーマンスとの関係について検討した。その結果、メンバーの役割取得については、集団圧力が強い集団では、全員が貢献的な役割取得パターンを示したのに対し、圧力の弱い討議集団では、メンバーは自らの役割レパートリに応じた役割を取得した。チーム・パフォーマンスについては、貢献的な役割を齊一的に取得したチームほど、高いパフォーマンスを示した。以上、「課題解決に向けた集団圧力を高めることで、貢献的な役割の齊一的な取得が促される。それにより、チームのパフォーマンスは向上する」という集団力学的メカニズムが明らかになった。

研究成果の概要（英文）： 10 types of discussant-roles were identified and the Discussant-roles Repertoire Estimation Scale (DRES) was developed. And, a group discussion experiment was conducted to test the relation between members' repertoire and the team performance. About members' role acquisition, the all members in the teams with strong group pressure acquired contributive roles. On the other hand, the members in the team with weak pressure acquired roles according to his/her own repertoire. About team performance, the team in which members acquired uniformly contributive roles showed high performance. The findings suggest the group dynamics mechanism, "building the group pressure on task solution will urge team members to acquisition contributive roles. Thereby, team performance will improve".

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：社会系心理学，実験系心理学

## 1. 研究開始当初の背景

【本研究の特色】 社会心理学において行われてきた会話コミュニケーションに関する研究の多くは、話者の発話行動という個の側面、または集団のパフォーマンスという全体

の側面について論じてきた。その中で、本研究案を含む話者役割に関する研究は、集団に位置づけられたメンバー間で生じる相互影響、すなわち“集団内での調整行動”に力点を置いている点が特徴である。役割取得とその

役割に応じて表出される行動は個人の行動ではあるが、集団内で絶えず調整・修正・変容が行われる。この集団内の力動性から話者の行動の特有性とパフォーマンスを捉える本研究案の視点は、グループ・ディスカッションに関する研究分野に対して、独自の知見を提供するものと期待される。

そして、本研究の第1目的である話者役割の分化と調整のプロセスは、討議の展開およびパフォーマンスを予測する手段へと発展する。グループ・ディスカッションは、社会のあらゆる場面で見られる一般的かつ重要な相互作用の様式である。その効果性の向上につながる本研究案は、社会心理学を含む複合的学術領域に留まらず、実社会に貢献しうる重要な研究である。

【これまでの研究で得られた知見】 これまでの取り組みの中で明らかにされた、話者のコミュニケーション行動の独自性という“行動”に関する知見、コミュニケーション参与スタイルおよびコミュニケーション・スキルという“特性”に関する知見、そして、リーダーシップ行動や集団構造の変容といった“グループ・ダイナミクス”に関する知見を、動的観点から包括的に検討したのが‘08-‘09研究である。この研究により、これまで具体的な研究ターゲットとはされてこなかった話者の役割(4系統18種)と各役割に特有の行動(5系統26メインカテゴリー・70サブカテゴリー)が特定されている。

【話者役割タイプについて】 集団内の役割に関して、リーダー以外の役割が注目されることはほとんどなかった。その中で、Benne & Sheats(1948)は3系統27種の役割を挙げている。これらは‘08-‘09研究が特定した話者役割タイプと、系統においては対応しているものの、個々の役割に目を向けると多くの点で異なっている。その中でも顕著な違いは、Benne & Sheats(1948)の役割には集団内相互作用において重要な役割を果たす受動的な役割が一切含まれていない点である。‘08-‘09研究により特定された話者役割タイプは、これまで行ってきた小集団会話実験の発話行動解析や、コミュニケーション参与スタイルに関する調査研究で明らかになった知見とも合致するものであることから、実際の話者役割を網羅している妥当性の高い結果であると考えられる。

本研究案は上記で挙げた知見以外にも、これまで得られた多くの研究成果を基盤としている。

【当該研究の位置づけと意義】 本研究案は話者役割の解明を目指す一連の研究計画の中に位置づけられる。話者役割に関する研究は、3つのステップからなる。第1のステップは“話者の独自性”であり、発話行動解析によって話者の発話行動をパターン化し、話者

役割の要素を行動面から特定することを目的とする。その成果はすでに博士論文や複数の学術論文にまとめられている。第2のステップは“話者役割の動的変動”であり、‘08-‘09研究が基盤となり、今回申請する本研究案の第1目的が基幹となる。さらにこのステップは、討議集団の性質と討議パフォーマンスの関係性について検討する第3ステップ“集団レベルへの拡張”に向けた重要な研究となる。また、本研究案の第2目的は、第3ステップである応用研究のパイロット研究として位置づけられる。このように本研究案は‘08-‘09研究を基盤として展開される連続性の高い研究計画である。

以上、本研究案は、話者の発話行動の特有性を集団内の相互影響の中で捉える“話者役割”という新しい概念をはじめ、複数の独自性の高いアイデアを投入することで、グループ・ディスカッションにおける力動性について解明することを目的としている。

## 2. 研究の目的

本研究案の目的は若手研究(B)(20730414)の助成を受けて行われた研究(‘08-‘09研究)の知見を基盤に、実際のグループ・ディスカッション場面における話者役割の分化と調整のプロセス(第1目的)、および討議集団の各メンバーが取得した話者役割の組み合わせである集団内構成がパフォーマンスに及ぼす影響(第2目的)を、動的アプローチにより明らかにすることである。

具体的な検討項目は、以下のとおりである。

- ・話者役割の分化と調整のプロセス
- ・話者役割取得レパトリと役割調整力が集団討議中の発話行動に及ぼす影響
- ・討議集団の役割構成がディスカッションのパフォーマンスに及ぼす影響

## 3. 研究の方法

研究展開は、はじめに話者役割取得傾向を測定する話者役割レパトリ尺度を作成する。話者役割取得レパトリ尺度は、‘08-‘09研究により得られた“どの役割がどの行動をどの比率で表出するのか”というデータを元に、行動に関する調査項目の得点から各役割の取得率を算出するものである。取得率が高い話者役割ほど、実際のグループ・ディスカッションにおいてその役割を取得しやすいということを意味する。

ただし、話者役割の取得においては、集団内構成が大きな影響を及ぼすと考えられる。たとえば、ある参加者が特定の話者役割について高い取得率を持っていても、他により高い取得率を持つ者がいれば、後者が全体の流れの中でその役割を取得することになると予測される。

さらにこのプロセスには、幅広い行動がで

きるかという話者役割取得レパートリの多様性と、役割調整力（状況を適切に認識し、自分のレパートリの中から最適なものを選択する能力）の高さが影響すると考えられる。これらが低い者は役割葛藤時に他の役割にスムーズに移行することができないと考えられる。もしも役割葛藤を起こしたメンバーの双方が、話者役割取得レパートリが乏しく、また役割調整力が低い場合は、対立が表面化し、ディスカッションの展開や成果、また他のメンバーの行動にネガティブな影響を及ぼすことになるであろう。

つぎに、集団討議中の話者役割の分化と調整のプロセスの時系列的変化を明らかにするために、グループ・ディスカッション実験を実施し、話者役割取得傾向と、実際のグループ・ディスカッションにおける役割取得行動との関連性について明らかにする。

実験の結果を踏まえて、事前に参加者の話者役割取得傾向を把握し、意図的に討議集団を編成した実験を行うことで、話者役割の集団内構成がパフォーマンスおよびディスカッションの展開をどのように規定するのかについて明らかにする。

#### 4. 研究成果

【話者役割レパートリ尺度の作成】はじめに、話者役割タイプの特定と、それを元にした話者役割取得レパートリを測定する尺度を作成した。

話者役割 (Discussant-roles) に関する実験や調査的手法を用いた研究において、大きな枠組みとして、運営、能動、受容、消極という4つの要素が一貫して見出されている。

尺度作成において調査データを因子分析した結果も同様に、4因子の時点で累積寄与率が70%を超えた。各因子の項目数は、第1因子42項目、第2因子21項目、第3因子19項目、第4因子12項目、そして、いずれの因子にも負荷しなかったのが4項目であった。

そこで、各因子に負荷した項目ごとに因子分析を行い、より詳細な話者役割の特定を行った。項目を精選するために基準を引き上げ、分析を繰り返した結果、全体分析の第1因子42項目は“要約者”、“討論者”、“批評家”、“妨害者”に、第2因子は“広聴者”、“傾聴者”に、第3因子は“傍聴者”、“抑制者”に、第4因子は“司会者”、“調整役”にそれぞれ分かれた。

4scales に分かれる 10subscales を討議参加者の役割レパートリを判断する基準とした。そして、10種類の話者役割の取得傾向を測定する47項目からなる尺度を“話者役割レパートリ基準(Discussant-roles Repertoire Scales; DReS)”と命名した。個々人の話者役割のレパートリは、10役割の評定平均値の高低のパターンによって表現されることになる。

【集団討議実験】 つぎに、グループ・ディ

スカッション実験を実施し、話者役割レパートリが役割取得行動に及ぼす影響、およびメンバーの役割取得がチーム・パフォーマンスの関係について検討した。実験では、グループ旅行のプランニング課題を課した。この課題は、1泊2日のグループ旅行を5人で話し合い、旅程表にプランを記入するというものであった。

実験後、討議映像を元に、実験協力者が討議中の役割取得行動をコーディングした。また、討議の質についても異なる実験協力者が評価した。

<話者役割レパートリの予測力> Sjøvoid (2006)は、成熟した集団ではメンバーが集団機能の認知を共有し、斉一的に行動するため、パフォーマンスのクオリティが高まると主張している。一方、未成熟な集団は各メンバーが自分の思い通りの役割に固執するという。もしそうであれば、メンバーが同一の機能を果たす成熟した集団では、個人要因が役割の取得に影響しないことになる。

上記の仮説を検証するために、役割ごとにメンバーの役割取得頻度と5人全員の平均値との差を求め、5人の10役割すべての差の絶対値を合計することで、役割取得における集団の非斉一度を算出した。そして、この値が全19集団の平均値より高い集団をメンバーが思い通りに役割を取得した“個別集団”、低い集団をメンバーが類似した役割取得パターンを示した“斉一集団”とした。

全集団を対象にしたとき、話者役割レパートリと実際の役割取得に明確な関連性は見出せなかった。そこで、斉一集団と個別集団の関連性を比較した。その結果、斉一集団は個別集団に比べて、有意に相関係数が低いことが確認された。この結果は、斉一集団のメンバーは個人特性とは関係なく同一の行動を取るのに対し、個別集団のメンバーは自らのレパートリに応じて役割を取得することを示している。

以上、話者役割レパートリは、個別集団においてのみ実際の集団討議における取得役割を予測することが確認された。しかしながら、集団に役割取得の斉一性の圧力が加かっている場合は、レパートリとは対応しない役割が取得されることが明らかになった。

<役割取得の斉一性とパフォーマンス> Sjøvoid(2006)に基づけば、正答のない討議という複雑な課題では、斉一的な集団の方が高いパフォーマンスを示すことになる。そこで、集団の斉一性がパフォーマンスに及ぼす影響について検討を行った。

はじめにパフォーマンスの分散に違いがあるか確認するためにF検定を行った。その結果、斉一集団ではパフォーマンスに大きなばらつきはなかったのに対して、個別集団では集団によってパフォーマンスに大きな違

いが見られた。つぎに、斉一性集団は個別集団に比べて高いパフォーマンスを示すか検証した。その結果、斉一集団は個別集団に比べて有意にパフォーマンス得点が高いことが明らかになった。したがって、Sjvold(2006)の主張が支持されたことになる。

＜集団状況と役割取得パターン＞ 役割取得の斉一性とパフォーマンスに関する結果を受けて、集団状況によって話者役割の取得パターンに違いがあるのかについて、追加分析を行った。はじめに、討議実験に参加した19集団を、役割取得の斉一性とパフォーマンスの高さで条件分けした。ただし、斉一集団ではパフォーマンス低群に該当する集団は見られなかった。一方、個別集団はパフォーマンスによって高・中・低の3群に分かれた。

これら5状況にある集団のメンバーがどのような話者役割を頻繁に取得していたのかについて検証した。はじめに斉一集団については、高いパフォーマンスを示した斉一集団のメンバーは、能動系の要約者・討論者・批評家、そして受容系の傾聴者を頻繁に取得し、逆に傍聴者と抑制者をほとんど取得しなかった。メンバーがこれらの役割を積極的に取得し、奥行きのある議論を行ったことが、パフォーマンスのクオリティを高めたと考えられる。特に討論者および傾聴者を取得し、抑制者を回避するという複雑な課題が要求する集団機能に合致した方針を、メンバーが共有していたことが大きい。

斉一性が高くても中程度のパフォーマンスに終わった集団のメンバーは、高パフォーマンス集団と同じくメンバー全員が討論者を取得するという方針をシェアし、傍聴者の取得を控える傾向にあった。しかしながら、全体を調整する役割を果たすものがいなかったことが、パフォーマンスの質を制限したと考えられる。

この調整役的重要性は、個別集団において顕著であった。個別集団でパフォーマンスの高かった集団のメンバーは、多くの貢献的な役割を取得せず、傍聴者や抑制者が多く取得頻度していた。しかしながら、一部のメンバーは調整役や要約者の役割を果たしていた。このことがパフォーマンスの高さに大きく影響していたと考えられる。個別集団でパフォーマンスが中程度の集団が、この調整役と要約者を除いて、ハイパフォーマンスの個別集団とほぼ同様の取得頻度を示していたことも、この考察を支持している。

＜集団凝集性と役割取得の斉一性＞ 同一の集団討議課題を課したにもかかわらず、斉一集団と個別集団に分かれた。では、集団討議実験で集団の斉一性を分けた要因は何であろうか。Task面では集団としての活動経験は大きな影響力を持つであろうし、Social emotion面ではメンバーの親密さや集団雰囲気

の良好さが大きな意味を持つであろう。参加集団は、課題のために一時的に結成した集団である。したがって、どの集団もこのメンバーで継続的な課題解決をした経験はなく、Task面の差があったとは考えられない。そこで、Social emotion的側面である凝集性に注目し、集団の凝集性と斉一性の関連性について検討を行った。

分析の結果、凝集性が高い集団では斉一性が高まり、それがパフォーマンスのクオリティを高めたことが分かった。この結果は、集団の良好な人間関係が、全員一丸となって課題に取り組もうという雰囲気を醸成したことを示唆している。

貢献的な役割をメンバーが斉一的に取得するには、集団は高度に成熟していなければならない。Sjvold(2006)は、この集団の成熟性を個人の状況適応性に還元している。Hirokawa(1987)も、意欲、リソースへのアクセサビリティ、パーソナリティやコミュニケーション・スキルが重要であると述べている。集団機能の認知と共有に関するこれらの主張議論は、メンバー個人の能力論である。たしかに、メンバーの意欲や能力が重要な役割を果たすのは間違いない。しかしながら、個人の非貢献的側面を抑制し、貢献的役割取得パターンを取らせようとする集団の圧力によって斉一性が生じると考えるならば、個人要因に説明の多くを求めべきではない。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

- ① 藤本 学、コミュニケーション参与スタイルに注目した小集団会話における発話行動生起プロセス、実験社会心理学研究、51, 79-90、2012、査読有
- ② 藤本 学、コミュニケーション・スキルの実践的研究に向けた ENDCORE モデルの実証的・概念的検討、パーソナリティ心理学研究、印刷中、査読有

〔学会発表〕(計1件)

- ① 藤本 学、討議者に貢献的な役割を取得させる要因とは何か?、日本社会心理学会第53回大会、2012年11月18日、つくば国際会議場

〔図書〕(計1件)

- ① 藤本 学、第9章「スキルとしてのコミュニケーション」、『幸福を目指す対人社会心理学—対人コミュニケーションと対人関係の科学』(編著)大坊郁夫、ナカニシヤ出版、2012、pp.193-201.

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

藤本 学 (FUJIMOTO MANABU)

久留米大学・文学部・准教授

研究者番号：00461468